

本能まちづくりニュース

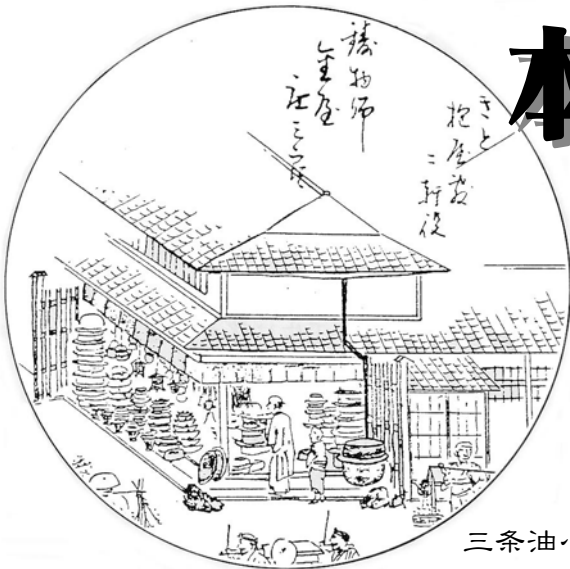
第35号 平成18年10月25日発行

本能まちづくり委員会
委員長 西嶋直和

E-mail: post@honnoh.net

URL http://www.honnoh.net

本能まちづくりニュースのカラー版は、ホームページをご覧ください。



三条油小路町絵図より鑄物師釜屋庄三郎方

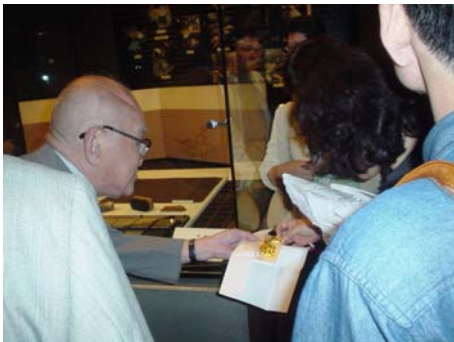
「匠の世界」展示を終えて

三条高倉の京都文化博物館での「染のまち本能～継ぐ技と心～」の展示が10月1日をもって終了いたしました。

5月16日から2階常設展示室の「匠の世界」において、本能まちづくり委員会・本能ものづくり推進会議が、本能学区紹介パネル、伝統産業に関わる職人さんの仕事場の写真、染の工程の解説と写真を展示。中央のケースには金彩工芸(松本勝氏・荒木泰博氏)・京縫刺繍(片岡信氏)・家紋上絵(鹿島敏雄氏)・型友禅(中東潔彦氏)をテーマにした作品・道具類を1ヶ月づつ交替で陳列しました。そして、テーマにそって5回ギャラリートークを行いました。

ギャラリートークとは、展示場内で見学者を集めて行う解説講演です。「匠の世界」ブースでは初めての試みだったようで、最初の頃、他の見学者に「解説の声がうるさくて集中して見られない」と苦情を訴えられて戸惑ったこともありました。その後は順調で、熱心に聞き入り、質問する見学者が増えました。時には外人さんもいて、鹿島氏は英語で応対！ギャラリートークは、説明を聞くだけでなく、例えば金箔を触らせてもらったり、刺繍や家紋手描きの実演を見たり、名前入りミニウチワをその場で作ってもらったりと、生きた道具や技に触れることができました。春と秋に地元で開催している「おいでやす染のまち本能」のミニ版出前といった雰囲気でも、好評のうちに幕を閉じました。

制作したパネル・写真類は本能ギャラリーで展示することを計画中です。京都文化博物館で発信の機会をいただけたことに感謝し、今後の展開を期待します。



ギャラリートーク

松本氏：金箔を触らせてもらう。(写真左上)
鹿島氏：筆・墨・時々コンパス・定規を使って、様々なデザインの家紋を手描き。(同上)
片岡氏：この姿勢で1日8時間以上。台に渡された棒は大切な脇役を果たす道具。(同左)
中東氏：型友禅の流暢な説明。いろいろな京小紋の型紙と染めあがった柄を見せてもらう。(同右)



◆◆◆◆ 第三回 町家探訪 ◆◆◆◆

京町家に住み続けて 松本邸

今回は元本能寺町の松本さんのお宅をお訪ねしました。ご主人とはほぼ同年代のよしみで、つい話が弾みました。20余年前、家の内部がテレビ番組「ウルトラアイ」の場面になったとか、当時のNHK美人アナ・畑恵さんが取材に来られ、ゆかたを着せて上げて、祇園祭に街を歩いてもらったとか等々、松本邸が世上著名なお宅であったことに改めて感心致しました。訪問記は同町的那須さんをお願いしています。(〇I)

「松本金彩」は創業が明治32(1899)年、現在のご当主は3代目の松本勝さんです。明治21(1888)年に建てられた町家は、お住まいと仕事場を兼ねた「職住一致」で、勝さんと奥様の恵美さん、娘さんご家族、合わせて7人がお住まいです。



松本邸前景

創業当時は三条通釜座町に居を構えられていたそうですが、明治43(1910)年、元本能寺町に移ってこられました。小川通に面した玄関の大戸は吊り戸で、かんぬき留めも残っています。大戸を開けると、土間の正面にかかる松本家の屋号を染め抜いた大きなのれんが目に飛び込んできます。また土間の隅には半間ほどの収納庫があり、扉を開けると布団が入っていました。しかも大きな板が出てきて、土間左手に隣接する店の間へ橋のように渡る仕掛けになっているのです。昔は丁稚さんと呼ばれる奉公人と寝食を共にしていたので、夜は店の間が丁稚さん達の寝室となっていました。

店の間から奥の間までの5室は、襖を開ければ通し間となり、表の窓を開けると風が本当によく通ります。暑い暑い京都の夏ですが、松本邸の母屋1階はクーラーを設置されていません。天然の風が何よりの涼しさ、本当に羨ましい限りです。奥の間の床柱は南天、床板はケヤキの一枚板で、客間としての重厚さを醸し出しています。中庭は草木、灯籠、つくばい等がバランスよく配され、マンションが隣接するまちなかとは思えないほど、緑豊かな空間となっています。奥の間から廊下伝いに進むと右手に離れと裏庭、



南天の床柱



天然のクーラーとなる中庭

茶室があります。2階は畳と板の間の仕事場となっていて、使い込まれた道具類や収納の箱、反物などが並べられています。1階の趣とは全く違った、仕事場としての緊

張感があります。

かつて、おくどさんや井戸もあった通り庭は改修され、現在1階から火袋を見上げることはできませんが、2階の仕事場の小窓から立派な柱と梁の「準棟纂纂(じゅんとうさんぺき)」を眺めることができました。



見上げると「準棟纂纂」

松本邸の敷地は小川通から東へ延び、更に南へかぎ型に曲がっているため、元本能寺町、池須町、元本能寺南町の3ヶ町にまたがっています。このあたりは織田信長の頃の本能寺があった場所で、昭和17(1942)年に防空壕を掘った際、信長時代の一部金の施してある角瓦(つのがわら)が出土したそうです。残念ながら処分されてしまったそうですが、昨今の信長ブーム、現存していたら話題となったことでしょう。

松本邸には昔から親戚、仕事関係、町内の方々が集い、また「おいでやす染のまち本能・公開工房ツアー」では、仕事場を開放していただいています。夏休みには地元の小中学生に袱紗作りの体験の場としても提供されました。松本さんご夫妻は、町家、昔からの調度品、そして人間関係をとて大切にされています。

町家が生活の場として、また仕事の場として十分に活用され、且つ人の集える柔軟性もあることに、改めて「生きている町家」を見る思いでした。(ゆ)

マイキモノプロデュースでどんなんです？

平成 15年 3月、第 1 回伝統産業の日「本ものに出会える日」より始めた「マイキモノプロデュース」は今秋の「おいでやす染のまち本能」開催で 8 回目になります。今までのお客様のお言葉はおおむね「呉服屋さんでは薦められるままに買ってしまふ。自分の好きな色で、納得するまで説明を受けて、しかも手頃な値段で眺めることができるので、大変嬉しい。」というものです。感想をお寄せいただきました中からいくつかご紹介しましょう。

「更紗の着物」

5月14日夕方、着物が届きました。

開いてびっくり、すごーくいいです。自分で生地を選び、模様を選び、地色を決め、自分ってセンス有るんだと思いきや、勝手に選んだものを、素敵に作り上げてくれたプロの仕事だなと感激しております。

高1の娘 「素敵だね、いいんじゃない、お母さんばかりずるい」

主人 「いいねー。でも、少し地味じゃない？」

私 「紬地だから少し地味がいいのよ、次は何色にしようかな？」

とりあえずこの感激をお伝えしたくてメールしました。

ありがとうございました (新井敏子さん)

「出来上がり楽しみです」

先日はお世話になりました。

私にとって着物は見て楽しむものでしたが、今回、自分だけの着物が色や柄も選んで染色から仕立てまで、お値段もお安くできるというので、京都のお友達と、ワクワクして行きました。会場ではどの着物も素敵で、あれこれと目移りするばかりでしたが、和気あいあいと楽しい雰囲気の中、実際に展示してあるのと同じ着物を着た方もいらして、着た時のイメージがわくのと同時に、具体的なアドバイスもいただけてよかったです。

私にとってはほんのひと時でしたが、京都の地元の方々とふれあえたことがなによりうれしく感じたことでした。出来上がりのマイ着物とっても楽しみです。ありがとうございました。(川上和子さん)

「ほしかった着物」

ほしいきものがあつた。お店ではなかなか置いていない色と柄。マイきものプロデュース、これは、もしやチャンスでは？

電話問い合わせでは、「何でもできる、買うより安い、でもいくら掛かるかは分からない」と言われた。ある意味すごく恐ろしい。要望を伝えて、えらい額になりそうだったら逃げて帰ろう。町おこしだし、怪しい団体ではないはずだ、たぶん…。そう思いながら「染めのまち本能」の会場へ。

「あ〜、あんた、これ自分でつくり」

自分で描いた絵を見せると、そう勧められた。実際の作業は職人さんをお願いするって聞いてたんだけど…。いやそれよりも、友禅なのに、伝統産業なのに、そんな軽いノリでええの？

紆余曲折を経たような、経なかったような。

結果、ほしかったきものは今、自分の手元にある。着ているだけで顔が笑う。

お眺えって爽快だ。

(谷口あかねさん・・・創作作家高岡由充氏の指導を受けマイキモノを創られました。)



来る 11 月 12 日(日)「おいでやす染のまち本能」で午前 11 時より、本能の辻子にて「マイキモノで全員集合！」を開催します。写真撮影やお披露目会など企画満載です。お眺えになった方、これからお考えの方、「どんなんですやろ？」と思われる方、どうぞお越しください。お待ちしております。

今年「何かが違う」本能体育祭

10月8日(日)第54回本能区民体育祭(主催:本能体育振興会)が堀川高校で開催されました。全戸配布されたチラシや京都新聞7日夕刊でも紹介されたように、本能まちづくり委員会の都市再生モデル調査事業に協力している立命館大学産業社会学部乾ゼミの学生さん約20人が、久保周三体育振興会会長のよびかけで企画運営に参加しました。本能学区では、高齢化が進む一方、マンションが建ち若い住民も増えています。本能の住民交流の場である区民運動会に若い息吹を吹き込んで、住民の参加を促したいという思いからです。

当日は、日の翳る時もあるほどよい好天。放送は実況もBGMも学生さん担当。BGMは、演歌からJポップ、流行のCMソング等と各年代対応の選曲で、気分を盛り上げるとともに、耳を楽しませてくれました。

学生さんが企画した新種目は、全員参加の「本能カルト〇×クイズ」と、「三世代で未来に運べ!本能魂」。〇×クイズは、「そんな常識!」と思いきや、どちら



〇×クイズは難しい

に行こうか迷う難題が時々まじって、参加者が淘汰されました。生き残った正解者にはお菓子のご褒美。「本能魂」は町対抗で子・親・祖父母世代の3人が「本能魂」の吹き込まれた風船をカゴに入れて運ぶ競走です。子

どもを背負うには親の力が必要、風船を飛ばさぬようバランスを保ちつつカゴを引くには3人の協力が必



新種目親子三代本能魂

要で、「本能魂」を将来に受け継いでほしい、という種目の狙いがあらわれていました。競技人数の足りない町に学生さんが助っ人出場したり、ゲートボールリレーに「学生チーム」が飛び入りしましたが、熟練の中高

年にはおいそれと勝てませんでした。

幼児競争では、学生が着ぐるみで登場。ウサギさんやピカチュウに励まされて走るかわいい幼児の姿が見られました。売店では、「きつねうどん」復活!強い風でテントが飛び、休憩所等の設営が大変でしたが、風で冷えた身体には、学生さんがよそってくれた熱いうどんがピッタリ。そして、場内での学生さんたちの機敏な行動は、観客の目に爽やかでした。



復活した「きつねうどん」

子どもからお年よりまで楽しめ、町内の親睦がはかれる本能体育祭。皆さんにとって、今年は如何だったでしょうか?体振の役員・委員さん、学生さん、お世話になりありがとうございました。(N村)

第二回本能ものしり講座「やっかい・しっかい(悉皆)」

~10月13日(金)夜 本能自治会館会議室にて~

今回の講師は元本能寺南町の悉皆屋、高山禮蔵氏です。「しっかい」という言葉は耳慣れぬ方もいらっしゃるでしょう。「やっかい」とは「お世話をする」こと。「しっかい」とは「ことごとく」という意味の通り、「悉皆」とは白生地から着物が出来上がるまでのお世話をする、つまり、加工業者への受け渡しと各工程での検品を請け負う、仕事です。



講演をする高山禮蔵氏

まず、反物が着物になるまでの流れ、次に、寸法の話、裏地・糊・染料・紋などについての説明がありました。尺貫法はメートル法の施行で廃れましたが、着物関係では「鯨尺(くじらじゃく)」が、現在もなお活用されているそうです。また、紋は、江戸時代には今の倍くらいの直径であったこと、日本人の体格向上に伴い反物の巾や長さも広く長くなってきたことには、一番変わらなさそうな部分に変化しているのだ、と驚きました。「上村松園画伯の美人画は、同じ構図の絵でも着物の紋はすべて違うんです」との解説に、着物の柄を見る人は多くても

紋まで見比べておられるとは、さすが!と思いました。さらさらとボードに絵を描かれ、とても分かりやすかったです。

立命館大学の学生さんも含め約40名が、普段着物に関わっていなければ知ることのできない、着物のあれこれを聞かせていただき、質問も飛び交いました。高山さんが最後に「お得意さんから仕事をいただいて、職人さんに仕事をしていただいて悉皆屋という仕事が成り立って行くのです。感謝の気持ちを感じることでここまでやってきています」とおっしゃったのが印象的でした。京染めは職人さんたちの信頼関係の上に成り立っていることがよくわかりました。(あ)

ひとりごと ○京都は今、芸術の秋、運動の秋、食欲の秋、まちづくり活動の秋!(ゆ)

○11月の「おいでやす染のまち本能」では、本能学区の職人さんの本ものの技にふれてみてください。(あ)

○来年1月9日、本能自治会館で恒例の成人式が開催されます。新成人の方、親御さん、ぜひご出席ください。学区の皆様でお祝いしましょう。(N村)